



探究の心、和のころ

教育学部長
教育学部教育学科 教授

佐藤 美子

令和6年4月、教育学部は皆さまからの多大なるご支援とご協力を賜り、西日本の私学系教育学部では初の中高理科教員免許の取得や、中学5教科すべての免許取得が可能となり、学生が主体的に免許科目を選択して学修する新たな教育システムを構築致しました。このような学びを追究する中で、学生は教職への強い使命感と教育力を培い、様々な課題に取り組む力を養います。その根底には、本学の建学の精神である「利他の心」や「和のころ」また、人や自然を大切に、命と共生していく心の涵養も必要です。

21世紀の社会は環境・エネルギー問題、少子高齢化や、食糧問題、災害の頻発など、多様な問題に直面していま

す。例えば、森林の伐採が過度に進み、気候変動や動植物の生態系が崩れるという問題がおきています。その解決には、多面的な視点で物事を捉え、「和のころ」をもって他者と協議を重ねるのが最良です。学校現場でも、教科横断的・総合的な学習により、生徒が自ら課題を見つけて解決を図り、探究的な手法を身につける活動が盛んになりました。教職を目指す学生たちにも文理融合の学びを深め、「探究の心」で多面的に物事を捉える力を育ててほしいと願っています。

時として、教師の言葉が人の人生を変えることがあります。2019年に「リチウムイオン電池」でノーベル賞を受賞された吉野彰先生が、小学4年の時の担任の先生の助言でファラデーの「ろうそくの科学」を読み、科学の道を目指したという話は有名です。未来の子供たちを育てる優れた教育者・保育者として「すべての子供たちの可能性を引き出す」ために、一人ひとりの多様な幸せや夢が実現できる持続可能な社会を目指して、「人間尊重」の理念の下、「探究の心、和のころ」を育む教育を推進していきます。ご支援の程、よろしくお願い致します。



「和の精神」で学んだこと

教務課長

永井 博嗣

今年の4月より教務課に異動となり、日々授業運営のサポート等をさせていただいております。

四天王寺大学に従事して25年となりますが、その間14年間の長期に渡りキャリアセンター（就職課）にて学生の皆さんの就職活動支援を行ってまいりました。

学生にとって就職活動は一大イベントであり、人生を左右すると言っても過言ではありません。

そんな就職活動において最初にぶつかる壁は、履歴書（エントリーシート）の作成です。

その中には、自己PRや志望動機とともに、「ガクチカ」（学生時代に力を入れたもの）を書く事が求められます。

コロナ禍以降、クラブ・サークル等に所属する学生が激減したため、ガクチカに書ける内容が何もないと嘆く

学生をたくさん見てきました。

そのため、仕方なくアルバイトのネタを書き、結果的に他の学生との差別化ができず、ありきたりな内容しか書けていない学生が少なくありません。

そんな中、本学においては「和の精神」の授業で、「瞑想」「写経」といった、他大学の学生が日常的に触れる機会が少ない事を経験できています。

授業前にざわついていても、「瞑想」の一言で気持ちを切り替える事ができる様に、いつの間にか皆さんの身体にも染みついていると思います。

しかしながら、ガクチカに「和の精神」で学んだ事を書いている学生を見るのが少なく残念に思えます。四天王寺大学の学生だからこそ経験できた「和の精神」を思い出し、大学時代に培ったものとしてアピールしてみたいかがでしょうか？

また、「瞑想」はストレスや不安の軽減・感情のコントロールの向上・記憶力や学習能力の向上が科学的にも証明されております。

ぜひ、「和の精神」で培った、慈愛の心と利他の精神を就職活動だけではなく、社会に出てからも実践し、心身のバランスを保ちながら、ストレスや疲れを解消し、リフレッシュする時間を作ってみてください。

❖ 学園訓「礼儀を正しくせよ」

文学部

国際コミュニケーション学科 講師

若松 正晃



学園訓の4つ目には「礼儀を正しくせよ」とあります。おそらく、これは聖徳太子が制定した十七條憲法の第4条目に相当するものだと思います。学生必携の『聖典聖歌集』にある「十七條憲法」には「四に曰く、群卿百僚、禮を以て本と爲よ。其れ民を治むるの本は要ず禮に在り。上、禮あらざれば下齋わず。下、禮無ければ必ず罪有り。是を似って、羣臣禮有れば、位次亂れず、百姓禮有れば、國家自ら治まる」と書かれています。つまり、社会を円滑にし、その秩序を保とうとする際には「礼」が重要だということです。

そもそも「礼」とは何でしょうか。言葉の定義を理解するため、辞書を開いてみましょう。『日本国語大辞典』（小学館）の「礼」の一項目には、「社会の秩序を保ち、人間相互の交際を全うするための礼儀作法・制度・儀式・文物など。儒教では、五常の一つとして、人の道として踏み行なうべき最も重要な規範とした。礼儀。」と説明され、まさに十七條憲法の「四曰、群卿百僚、以^レ礼為^レ本、其治民之本、要在于礼」が初出の用例として記載されています。『大辞林』（三省堂）や『広辞苑』（岩波書店）にも似たような説明が見つかります。「礼」を調べると「礼儀」とも説明されていることから、「礼」とはそれを表現する行為そのものでもありと考えられるでしょう。また「礼を重んじる」であったり「礼を失する」と使われたりするように、「礼」は他者への何らかの姿勢や態度ともいえます。一般的には、年上の人や目上の人に対して敬意を表すと理解されていると思われるのですが、上のようになると、立場の上下にかかわらず人と人の関係における何かしらの心的・身体的態度であることになるでしょう。

聖徳太子の十七條憲法は、貴族や官僚など政治にかかわる人々に向けて書かれたものであり、臣民を統べるもの、臣民を守る立場にいるものに対して道徳や心がけを説いたものです。統治するものと統治されるものの関係性において「礼」が如何に大切なものとして考えられていたのかが窺われます。その「礼」とは道徳的、倫理的なものであるというだけではなく、人としてその深みを感じさせるような振る舞いだといえるでしょう。その根底にあるものは、立場に関係なく他者への敬意です。学生であれば先輩後輩関係、社会人であれば上司や部下の関係など、人間の社会においては常に（可視不可視の）いわゆる上下関係が存在すると思います。そのような上下の関係の枠を超え、他者を敬うことが大切だと説いているのです。ある意味、社会性を持つ人間としての根幹に触れる説法をしているといえるでしょう。

ここで思い出されるのは、イギリスの伝統の一つである“noblesse oblige”です。ことばの意味だけでなく、英語の歴史的発展をも記述している *Oxford English Dictionary* (OUP) によると、“noblesse oblige” は “Phrase suggesting that noble ancestry contains (to honourable behavior) ; privilege entails responsibility” と説明されています。Webster's *The Third New International Dictionary* (Merriam-Webster) の方が “the obligation of honorable, generous,

and responsible behavior associated with high rank or birth” と、より具体的に書かれています。少々乱暴ですが、雑駁にまとめると「高い身分にともなう義務」といった意味の語です。

しかし、ここでいう義務とはどのようなものなのか、辞書的な意味から想像するのは難しいので、2017年にノーベル文学賞を受賞した Kazuo Ishiguro の小説 *The Remains of the Day* (1989) の一場面を元に考えてみましょう。ナチスが台頭する第一次世界大戦から、第二次世界大戦後までの激動の時代を経ていくイギリスを舞台とするこの小説では、大英帝国の衰退に軌を合わせるように、主人公ステューブンスもアイデンティティの岐路に立たされます。かつてオックスフォード近郊のダーリントン・ホールという由緒ある英国貴族の屋敷で執事を務めていたステューブンスはこれまでの半生を振り返り、新興国アメリカの台頭とともに没落していくイギリス貴族階級と新しい主人であるアメリカ人の価値観の間で、執事としての新たな在り方を模索します。本作品が描くのは、執事ステューブンス個人の物語であると同時に、イギリスの物語でもあるのです。

作中、もちろんフィクションですが、ダーリントン・ホールで非公式な国際会議が開かれ、ベルサイユ条約に定めるいくつかの過酷な条項の改定を巡る議論がなされます。その晩餐会の席上でのアメリカ上院議員のルイスとイギリス貴族のダーリントン卿とのやりとりが描かれますが、ここでルイス議員とダーリントン卿の意見が真っ向から対立します。ルイス議員によって新しい時代の政治と国際協調のあり方が提示される一方、ダーリントン卿の言葉には、時代のうねりの中でもがく貴族階級の矜持が描かれます。

直接的に “noblesse oblige” という語こそ使用されていませんが、国際協調については全くの素人であるダーリントン卿ははじめその場に招かれた貴族階級の人々の議論は空論であると述べるルイスのいう「高貴なる本能」とダーリントンのいう「高尚な望み」こそが “noblesse oblige” を意味しています。議論の中心に “noblesse oblige” を置きながら、そのものに言及することなく貴族政治の終焉を宣言する新時代のルイスと、あくまでもそれに重きを置こうとする旧時代のダーリントン卿という構図をも描いているのです。ダーリントン卿のルイスへの反論の根底に、領内の民の生命と生活の安全を守る義務感があることが明らかでしょう。領主は民に敬意を示し義務を負い、それゆえに、民は領主に敬意を示し信頼するのです。ここでいう相手への敬意は、このエッセイで我々が考察している「礼」と同義のものであると考えられます。新時代の民主主義を代表するルイスの発言も全体の利益の為を考えてのものであることは明らかですが、ダーリントン卿のことばは、“noblesse oblige” を体現しようとする貴族の矜持の表れだといえるでしょう。民への敬意と信頼ゆえに、民の未来を自分たち以外のものに委ねることは到底できないのです。

このように、帝国を維持してきた英国紳士も、“noblesse oblige” を自らに課し、善良な人間であろうとしてきました。「礼」という語で、相手への敬意と思いやりの心を説いた聖徳太子と、形は違えど同じような思考様式であろうと考えられます。「礼」=敬意をもって相手に接し、その言動の背景に何があるのかに思いを巡らせる。コミュニケーションは本来的に、このような他者への心の寄り添いがあったはじめて成り立つものです。他者を敬い、他者に思いやるのは世界共通であるように思われます。我々も、常に他者への敬意を持って過ごしたいものです。

「ウパーヤ」学生編集員募集！！

本学の仏教教育広報誌「ウパーヤ」の紙面作りに参加していただける学生編集員を募集しています。仏教、寺院、仏像、巡礼、歴史、日本文化などに興味のある方、また取材や記事の執筆に関心のある方ならどなたでも歓迎します。学部学科専攻も問いません。

これまで第4面の「聖徳太子ゆかりの地をめぐる」の取材記事の執筆、およびその取材見学の様子をホームページに掲載するなどの活動をしてきました。

また、本学が仏教教育の一環として実施している野中寺での座禅会に参加し、その実施状況をレポートしていただいたこともあります。

興味のある方、詳しい話を聞きたいという方は、第4面下に記載されているメールアドレスにメールを寄せていただくか、仏教文化研究所の研究員にお声を掛けてください。

ご連絡お待ちしております。

(若松 正晃)

第 25 回卒業生インタビュー

話し手：今北 潤（いまきた じゅん）私立高校（兵庫県）講師（大阪大学大学院 人文学研究科博士前期課程（修士）修了）
落水 裕大（おちみず ゆうだい）公立高校（兵庫県）講師（大阪教育大学大学院 教育学研究科修士課程修了）
両人とも令和 3 年 3 月 人文社会学部日本学科卒業
聞き手：奥羽 充規（おくう ちゅうき）仏教文化研究所研究員 文部国際コミュニケーション学科教授、本編編集

仕事について

今北：私は現在、兵庫県の私立高校で「地歴」の教員をしています。歴史がとても好きで、大学卒業後もまだまだ学びたいという気持ちが心の底にあり、四天王寺大学を卒業後、歴史研究をするために大阪大学文学部の研究生を 1 年経て、大阪大学大学院に進学しました。大学院では、基本的に日本史を研究しましたが、いわゆる学校教育の中で教えられてきた日本史ではなく、自分自身にとって日本史とはどういうものなのかを深く学ぶことができたと思います。そして現在では、大阪大学大学院で学んだことに加えて、特に四天王寺大学の「博物館学」で学んだことをどうやって高校の授業で活かすことができるのか、どうやってその資料について生徒に伝えるのか、そして博物館学と学校をどう連携していけばよいのかを常に考えながら、高校での教員生活を過ごしています。

落水：私は現在、兵庫県の公立高校にて講師として勤務しておりますが、四天王寺大学卒業後、一度民間企業に就職しました。企業での社会経験の中で、職場と労働者との雇用のミスマッチをどうなくすのかという問いについて考えはじめました。教育を変えればそういう職場と労働者がミスマッチする社会をなくすことができるのではないかと、いわゆるインクルーシブな社会を創造できるのではないかと考えました。そして、その為の方法を学ぶために、1 年後に大阪教育大学大学院に進学したのです。大学院では主にポートフォリオ評価の研究を行いました。教育方法学という学問領域の中で能力とか、評価に興味関心があって、修士課程のときは、ポートフォリオを用いて振り返ることによって、社会科学の歴史科目で特に注目を集めている学習者のレリバンス（関連性）を構築することができるのではないかと、という仮説のもとで研究していました。

「和の精神（礼拝）」について

落水：礼拝の授業で一番私が印象的だったのは、夏学期の瞑想と冬学期の写経でした。

今北：私もそうでした。特に瞑想は大学に入るまではやったことがなかったので、とても面白いなと思いましたし、写経についても初の経験だったこともあり、前向きに取り組めた記憶があります。

落水：私は、瞑想や写経を実践することにより生活のメリハリがついたと思います。瞑想については習慣化することにより今の生活でも結構役立っています。

今北：そうですね。私もメリハリ的重要性を感じています。その 1 つの手段として瞑想を通して生徒たちに体験的に伝えることができると考えています。例えば、休み時間のうわついた感じを引きずらないように授業の始まりにメリハリをつけるとか。言葉で説明することも大切ですが、体験的にその重要性を伝えることもよいかと思っています。それから、写経についてですが、当時は嫌だなあと感じながら行っていました（笑）。しかし、今になると、その経験から何か一つに没頭するということの重要性を実感しています。

落水：同感です。瞑想にしても、脳内の様々な情報を整理してすっきりさせるマインドリセットを行う体験はとても貴重だと思います。瞑想、写経、いずれの行為にしてもその意味が分かって、後からその重要性がわかってきます。

今北：はい。学生時代に体験できてとても良かったと、今になって実感しています。



在学生へのアドバイス

落水：私が 1 年生の皆さんにお勧めするのは、本を読むことです。できれば難しい古典を読んでほしいと思います。いわゆるハウツー本ではなく、時代が変わっても価値の変わらない本を読んでほしいです。長きにわたって多くの先人たちから受け継がれてきた本をじっくり読んでほしいです。ハウツー本は単なる離乳食。そこから成長して、英知を積み重ねることができる本をたくさん読んでほしいです。

今北：そういえば、大学入学時に学科の先生から「100 万冊の本を読みなさい」と言われましたね。聞いた時には「絶対無理やろー」と思いましたが、今では「言葉を刷り込む」ことの重要性を訴えておられたのかなと思います。

落水：私の好きな言葉に「最終学歴より最新学習歴」という言葉があります。学びを常にバージョンアップすることで自分の付加価値を恒常的に高めていくことを意味していますが、その中に本を読むことがあれば、なお素晴らしいと思っています。どれほど多くの本を読み、多くの言葉を脳内にインプットするかが、自分の口から出る言葉に影響し、その幅に繋がっていく。そして、そのインプット量こそが人格形成につながります。いわゆる「豊かな人間性」を育むこと繋がるとも思います。そういえば、京都の百万遍交差点を知っていますか？

今北：もちろんです。

落水：知恩寺の空円上人が後醍醐天皇の命で七日間の「百万遍」念仏を行い、その結果、疫病が収まったことから後醍醐天皇より「百万遍」の号を賜り、のちにその周辺の地名（交差点）になったものですね。百万遍念仏は、もともとは仏教寺院の行法ですが、地名となったことで、人々に積み重ねることの重要性を思い起こさせるものになったといえます。このように、積み重ねることの大切さを知ってほしいです。「継続は力なり」「雨垂れ石を穿つ」とも言いますね。物事の本質をとらえた言葉だとも思います。

今北：私が皆さんにお伝えしたいのは、「心からやりたいと思うことをやれ」ということです。私は大学院に進学する際に、多くの人に反対されました。将来を保証されない不安定な道を歩むことに懸念されたのだと思います。しかしながら、実際に大学院に進学してから実感したのは、自分がやりたいと思っているその気持ちは止められないということです。周りの意見に従って、安全な道に進むだけでは後悔していただろうし、いつまでも自分の心の中でその後悔する気持ちを引きずっていたと思います。不安定だから、不安だからという理由で、自分のやりたいことをあきらめるのではなく、時に自分の心にしたがって進むという勇気を持ってほしいです。そうすることで、自分ならではの人生を後悔なく歩むことができますし、生きる目的を持つことができるとも思います。若い今だからこそ、挑戦できるのです。

落水：私自身、現在は高校の教員をしながら論文を書いています。先ほど言いましたが日本の教育を変えるという目標があり、そしてかなえたい夢があります。皆さんにも、心からやりたいことを実現する人になってほしいと思います。

令和 6 年度 夏学期「和の精神 I」礼拝 講話

| | | | | | |
|----------|--------------------|---|----------|--------------------------|--|
| 4 月 11 日 | 藤谷 厚生先生 桃尾 幸順先生 | 受講こころえ - 授業規律に関して / 礼拝説明 授戒オリエンテーション | 5 月 30 日 | 上野 舞斗先生 | 「学園訓—誠実について—」 |
| 4 月 18 日 | 須原 祥二学長 藤谷 厚生先生 | 「『和の精神』で学ぶこと」 「『ウバーヤ』について」 | 6 月 6 日 | 矢羽野 隆男先生 山崎 達枝先生・学生有志 | 「学園訓—和について—」 「令和 6 年能登半島地震における 災害ボランティア活動について」 |
| 4 月 25 日 | 杉中 康平先生 | 「『和の精神』を学ぶ意義」 | 6 月 13 日 | 南谷 美保先生 | 「仏像を知ろう」 |
| | 伊達 由実先生 | 「学修ポートフォリオの目標設定について」 | 6 月 20 日 | 仲谷 和記先生 | 「薬物乱用の害について」 |
| 5 月 2 日 | 桃尾 幸順先生 | 「大学生生活の心得」 | 6 月 27 日 | 原 祐子先生 | 「『聖歌』について」 |
| 5 月 9 日 | 成田 由岐子先生 | 「読経概論・瞑想 一心を整える楽しみ—」 | 7 月 4 日 | 奥羽 充規先生・学生有志 | 「グローバル教育研修と和の精神」 |
| | | 「学生生活とリスク社会について ～犯罪に巻き込まれない、起こさないために～」 | 7 月 11 日 | 保健センター・藤井寺保健所 | 「性感染症の予防について」 |
| 5 月 16 日 | 坂本 峰徳常務理事 | 「建学の精神と聖徳太子」 | 7 月 18 日 | 杉中 康平先生 藤谷 厚生先生 | 「学修ポートフォリオの記録について」 夏学期を終えるにあたって |
| 5 月 23 日 | 中田 貴真先生 | 「学園訓—礼儀について—」 | | | |

聖徳太子ゆかりの地をめぐる

— 愛染堂勝鬘院(大阪市天王寺区) —



金堂

大阪メトロ谷町線・四天王寺前太陽ヶ丘駅から徒歩3分歩くと、マンション街の中に見事な朱塗りの門が現れます。今回の取材先、愛染堂勝鬘院です。

愛染堂勝鬘院は西暦593年に四天王寺の四箇院のひとつ、「施薬院」として建立されたのが始まりです。庶民救済の中心地としてあらゆる薬草を植え、「病に応じてこれら薬草を広く人々に与え、人間の病気への恐れや苦しみを除いてあげたい」という聖徳太子の意向を反映し、また実践するものでもありました。現在、その名残で境内には数種類のハーブが植えられていますが、建立当時は現在よりも広大でした。ここが「勝鬘院」と呼ばれるようになったのは、聖徳太子がここで勝鬘経を人々に講義したことからと言われています。金堂には、愛染堂の名前の由来となった愛染明王のほか、聖徳太子、また勝鬘経のヒロイン・勝鬘夫人像が安置されています。

境内には飲むと恋愛が成就するといわれる「愛染めの霊水」や、小説家・川口松太郎氏の代表作『愛染かつら』のモデルとなった縁結びの霊木「愛染かつら」があります。樹齢数百年といわれる巨大な桂の木に、ノウゼンカズラのツルが巻き付き、両者が一体となったその姿は、まるで男女が寄り添っているように見え、恋愛成就・夫婦和合の霊木として信仰されています。この霊木の前に二人並んで立ち、

愛を語り合った男女は、たとえ二人がどんな苦難にあらうと、やがて結ばれるという古い言い伝えがあります。実際、映画『愛染かつら』の主題歌をデュエットした霧島昇、ミス・コロムビア(松原操)は、これがきっかけで結婚するに至っています。6月30日～7月2日の愛染祭の頃にはオレンジ色の花が満開に咲くそうです。

金堂の後方には、多宝塔がそびえ立ちます。多宝塔は戦国時代の太田石山寺の戦いの際に織田信長に焼かれてしまいましたが、1597年に豊臣秀吉によって再建されました。大阪市に現存する中では最古の木造建造物で、国の重要文化財(旧国宝)に指定されています。多宝塔の外壁の梁(はり)には十二支が1面に3体ずつ(計12体)彫られています。昔は多宝塔の周辺は薬草を栽培する畑で、その西側まで海が広がり、そこから見える夕日がとても綺麗だったそうです。近くには、「夕日岡(夕陽丘) 命名の地」と記された碑もありました。

現地に足を運ぶことで、「和の精神」などの授業で学んだことや、ことばの意味や重要性に改めて気づくことができました。皆さんも恋愛だけでなくさまざまな良いご縁のためにお参りに行ってみてはいかがでしょうか。

(学生編集員 西宮 聖矢)



多宝塔

仏教のことば

ぶっしょう

— 仏性 —

仏性とは、仏としての本性、性質のことです。大乘仏教では、すべての衆生には、仏としての本質がある。「涅槃経」には、「一切衆生悉有仏性」(一切の衆生には悉く仏性がある)と説かれ、それ故に我々は、みな仏と成ることができ(可能性がある)ということです。

つまり、我々は如来様と同じ清らかな本質を備えており、本来は仏であるという訳です。また大乘仏典である「首楞嚴経」には、「清浄の本心とは、言葉を変えていえば仏性である。仏性とは仏の種である。」とも説かれ

ています。仏性とは、仏となる種(因)でもあり、別にこれを如来蔵ともよんでいます。

ところが、我々の心には煩惱があり、この煩惱の作用が我々の持つ本来清浄なる仏性の働きを覆い隠しているというのです。喩えて言いますと、仏性とは秋の夜の満月のようなもので、本来は清らかに輝いて作用していても、そこに厚い雲である煩惱が出てきて遮ってしまえば、折角の清らかな仏性の作用である月の光ささも、我々には見えなくなってしまうようなものです。しかし、それを遮る煩惱の雲を払い除けば、再び虚空には美しい清浄な月の光、仏性の働きが如実に顕れてきます。我々の心の中の煩惱を取り除けば、本来持っている仏性の心は自ずと働き出すという訳です。

ともすると慌ただしい現代社会の生活の中で、忘れてしまいそうなこの仏性の心を、再び取り戻すことは、とても意義のあることであると考えます。

(藤谷 厚生)

編集後記

今号では、教育学部部長の佐藤美子先生に「探究の心、和のこころ」、永井博嗣教授課長に「和の精神」で学んだこと」と題してご執筆いただきました。佐藤先生は自ら課題を見つけて解決を図る「探究の心」と多面的な視点で物事を捉え、他者と協議を重ねる「和のこころ」の大切さを、永井氏は「和の精神」の授業で培った様々なことを、就職活動や社会に出てから生かしてほしいということをお話されています。卒業生インタビューの記事では、令和3年度に日本学部の南谷ゼミの同窓生であった今北さん、落水さんにコメントをいただきました。両人とも向学心があり、卒業後は大学院への進学をなされ、今は教育者としての夢を果たされて、教育現場で活躍しておられます。また文学部国際コミュニケーション学科の若松正晃先生には学園訓の「礼儀を正しくせよ」についてご寄稿いただき、学生編集員による愛染堂勝鬘院の紹介記事、所長の藤谷先生による「仏教のことば—仏性」についての解説も掲載しております。

(桃尾 幸順)

研究員紹介

所長 藤谷 厚生(教授)

研究員

上 宏道(教授) 奥羽 充規(教授)
杉中 康平(教授) 南谷 美保(教授)
矢野野 隆男(教授) 中田 貴真(准教授)
李 美子(准教授) 上野 舞斗(専任講師)
坂本 光徳(専任講師) 若松 正晃(専任講師)

客員研究員 桃尾 幸順

(職位・五十音順)

UPĀYA(ウパーヤ) 25号

ウパーヤとは「高い目標へ到達すること」を意味し、漢訳では「方便」となります。

令和6年9月1日発行

発行 四天王寺大学

仏教文化研究所 仏教教育センター

所在地 大阪府羽曳野市学園前3丁目2-1

TEL:072-956-3181(代) FAX:072-956-9940

URL: <http://www.shitennoji.ac.jp/>

「UPĀYA(ウパーヤ)」に関する
ご意見やご感想はこちらへお寄せください。

E-mail | bukken@shitennoji.ac.jp
(件名は「ウパーヤ」としてください)

